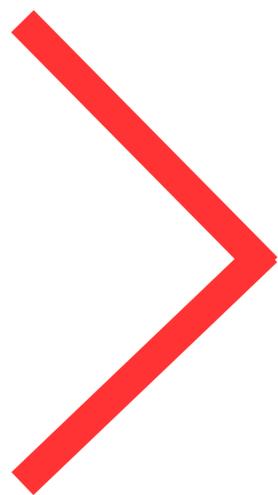


新春

社説対決

産経新聞



原発 事故後5年の正念場だ
最終処分場立地へ理解を促せ

原子力の安全な利用は資源小国日本の発展に欠かせない

その筆頭は、

最終処分場の立地に向けた第一歩となる
「科学的有望地」の提示である。

いつまでも最終処分場を欠いたままだと、
やがて日本の原子力発電は袋小路で行き詰まる。

今年は、

原発再稼働を加速させるべきときでもある。

これをフロントエンドの目標としたい。

原子力規制委員会は、審査の効率を上げるべきだ。
この再稼働のペースでは二酸化炭素削減がままならない。
電気代も容易には下がらない。

原発を準国産エネルギーとして活用するには、
フロントエンドとバックエンドをつないで

核燃料サイクルの環（わ）を完成させなければならない。

1兆円を投じても止まったままで、
その責任もあいまいな、もんじゅは不要でも、
資源を輸入に頼る日本に高速増殖炉が欠かせぬことに変わりはない。

原子力エネルギーは、国を支える主要な柱の一本だ。

ないがしろにすると国が傾く。それを肝に銘じるべきである。

読売、朝日、毎日、産経、日経、東京の6紙の社説で

1月1日から7日までに原発に触れていたのは読売、産経、東京の3紙。

このうち産経と東京はたまたま同日の1月6日の社説でそれぞれ大きく触れていました。
つとということで、この2つの社説の一部を引用しています。

東京新聞

年のはじめに考える
新しい春の風よ吹け

福島県の人口は十一万人減りました。
その原因を忘れられるというのなら、私たちはどうかしています。

忘却の風にあおられて脱・脱原発への逆回転が加速しています。

昨年暮れの福井地裁の決定は、その象徴ではなかったか。
専門家の意見を尊重し、よほどの落ち度がない限り、
安全審査の技術的判断には踏み込まない。
(中略) 自らの判断を回避した司法の責任放棄です。

そこは風景も時間も混沌とした止まったままの世界だった

加藤哲監督「日本零年～フクシマからの風第二章」

忘却は無責任の温床です。だが何度でも繰り返す。

原子力規制委員会にも国にも司法にも、むろん電力会社にも、
原発の安全など到底保証できません。
過酷事故の責任などは負えません。
都会の電力消費者も、原発立地地域の人たちも、
多くはそれに気づいているはずですが。
なのに、暮らしのためにと割り切って、
あるいは、仕方がないさとおきらめて、
“もやもや”しながら日々を送っていませんか。

(原発事故に) 被害者なんていないんだ。
(電力の消費者は) 全員加害者なんだよね

加藤哲監督「フクシマからの風～第一章喪失あるいは蜃」

チェルノブイリで気がつかないから、フクシマが起きたんだ。
フクシマで気づかなければ、いつかまた、どこかで起きる

加藤哲監督「フクシマからの風～第一章喪失あるいは蜃」

再生可能エネルギーには、世界中で新しい風が吹いています。

私たちも当事者としてこの“もやもや”に向き合い、乗り越え、
変わらなければなりません。

少しだけ感想を

東京新聞の社説は加藤哲監督の映画を軸にしてあり、一部の引用では恐らく雰囲気伝わらないと思います。吹き出しにした社説で引用された映画中のセリフが気になった方は実際の社説をご覧ください。
新年の社説チェックは2014年から始めて、今回3回目。2014年はまだ各紙で結構大きく触れてたんですが。。。今回の比較で感じるのは、考えるときのベースが根本的に違う、という点です。産経新聞の主張は東京新聞の言う「忘却」の上になり立っているようにしか見えません。福島を取り返しのつかない事故で、既に『国は傾いている』と考えるべきなのではないでしょうか？『傾いている』ように見えてないとすると、何かを「忘却」あるいは見て見ぬふりをしているだけ。そして、自分自身も何かを「忘却」してないか。。。改めて考え直そうと思います。